

脂肪貯蔵ホルモン、ニューロテンシンが肥満に影響

肥満やそれと合併する糖尿病や肝脂肪変性などの疾患は、毎年およそ 250 万人の死亡を引き起こし、医療界ではこれに対抗していかねばならない。ニューロテンシンは小腸の腸内分泌細胞から脂肪の摂取により分泌されるホルモンで、余分な脂肪の貯蔵に働き、種々のがんの成長を促進することも分かっている。血中プロニューロテンシン値の上昇が糖尿病や心臓血管病のリスクや死亡率の増大に関連しているが、ニューロテンシンがこれらの疾患の原因としてどのような役割を担っているのかは不明である。

本研究では、高脂肪食の摂取による肥満や肝脂肪変性、インスリン抵抗性に対するニューロテンシンの役割についてニューロテンシン欠乏マウスを用いて検討した。その結果、血中ニューロテンシン値が低いマウスでは、高脂肪食を与えても脂肪吸収率が正常マウスに比べて低く、インスリン抵抗性の上昇を引き起こさなかった。ヒトにおける影響を検討するため、ヒトの血中プロニューロテンシン値を調べたところ、プロニューロテンシン値が高い人では低い人に比べて BMI（肥満指数）が高く、将来肥満となるリスクは 2 倍となった。

したがって、ニューロテンシンは肥満に直接的に影響を及ぼすことが明らかとなり、とくに脂肪量の多い食事を習慣的に摂取する人で、肥満の予測に有用となる可能性が示唆された。

出典：Nature. 2016 May 19; 533(7603): 411-415